

和服とお袈裟・作務衣

東 隆 真

日本人の日常生活のなかには、仏教、禪とのかかわりをたくさん見い出すことができます。それは、すでによく知られているのもありますし、案外見すごしている場合もあります。

日常生活といえば、衣、食、住の三方面が、その基本となるでしょう。

まず、私たちの和服をとりあげてみたいとおもいます。

昨今は、冠婚葬祭などのあらたまった時や特別の行事をのぞいて、和服を着ることは少くなりました。と

くに男性の場合は、この傾向が強い。洋服を着ているほうが、ずっと多いわけです。けれども、和服のすばらしさは、よその国の民族衣装にくらべて、けっしてひけをとるものではありません。

さて、その和服ですが、和服は、要するに、長方形や正方形の布切れを縫いあわせてつくりま

す。洋服の場合は、円形や梯形の布切れを人体にあわせて縫いあわせてゆきますから、よほどちがいます。

和服は、たんすにしまいこむときは、たたんでしまえば、小さな長方形にまとまってしまいます。

洋服は和服のようにたたみこむことはしません。ハ

ンガーにつるすわけです。

和服は、方形の布切れを縫いあわせてできていること、そして、小さく方形にたたむことができること。

この点は、仏教僧侶のお袈裟に共通するところがあります。

お袈裟も、方形の布切れを縫いあわせてつくり、方形に小さくたたみこんで収納することができます。

お袈裟は、もともと、仏教僧侶の衣服であり、シンボルです。お袈裟をまとわない仏教徒はありえないのです。

とくに、天台宗、真言宗、曹洞宗、浄土宗などでは、お袈裟のつくり方、身にまとう方法、収納法などについて、いちいち、こまかい規定があります。

和服が、いつごろから、なぜ、どのようにして、現在のかたちになったのか、門外漢の私はまったく知りません。

しかし、きっと、仏教のお袈裟と、どこかがかかわりがあつたにちがいないと思われてなりません。

しかし、お袈裟と和服との関係については、まだ誰も指摘していないようです。

くわしく調べてゆけば、いちいちおもしろいことがわかってくるのではないでしょうか。

大学の卒業論文のテーマになります。

日本の服装史に新しい一ページを加えることができます。かも知れません。

つぎに、作務衣について。

このごろ、作務衣が流行しています。

作務衣は、文字どおり、禪僧が、作務つまり労働するときに着用する衣服です。

和服を改良したのと言ってよいでしょうが、上下に分かれているものもあり、いないものもあります。

上下に分かれている作務衣は、上部は袖が小さく袖口はしばってあり、下部はもんぺのようなズボン様のかたちになっています。

なかなか軽便な衣服ですが、もともと労働着ですか

ら、正装ではありません。ですから、あらたまった場合に作務衣を着てひとに対することは礼を欠くことになりません。

やむをえないときは、作務衣を着ている非礼を相手におくことわりしなければなりません。

しかし、そんなこととはおかまいなしに、この作務衣が一般に流行して、ニューファッションとしてとりあげられ、もてはやされるようになりました。

なかには、京都のさる有名な禪宗の本山の特別許可のもとにつくった本格的な作務衣なるものまで登場して、新聞広告をにぎわしています。

管長さんのお墨付きを麗々しく掲げて売り出すといった思わせぶりの商法です。

法衣専門店ですべての作務衣と、ちかごろの企業が新聞、雑誌の広告で売り出している作務衣とは、厳密に言えば、ややちがいがあります。

それにしても、権威ある作務衣として販売するために管長や本山までまきぞえにした広告には、ばかばか

しさを通りこして、おもわず吹き出してしまいます。

なにも知らない一般の人を愚弄しているといえ、すこし言いすぎでしょうか。

だいたい、作務衣に、そう特別の変ったかたちや用途があるわけではありません。それに、法衣専門店の作務衣の方が、どちらかといえば廉価のようです。

私の知人の東大教授は、近ごろはやりの作務衣を着て、下駄をはいて、街のなかを闊歩しています。

洋服を着た私は、そのすがたを、ほほえましくながめながら、肩をならべて歩くのです。

私も、書齋で仕事をしているときや、庭に出て草花をいじっているときは、法衣専門店ですべての作務衣を愛用しています。

(駒沢女子短期大学学監、教授)

